Ⅲ.資料

1.「高校魅力化評価システム」診断結果チェックシート
2.全国高等学校小規模校サミットの取り組み
3.報道記事

高校魅力化評価システム2023①②比較【山形県立小国高等学校】

調査期間：①2023年6月27日～7月9日☒2023年12月19日～12月22日

① 育成を目指す生徒像
校訓　「自律・忍耐・向上」　　メインテーマ　「挑め、ともに！」
学校教育目標
1　郷土に誇りと愛着を持ち、学び続けながらよりよい地域づくりに主体的に関わる人材を育成する。
2　健康で豊かな人間性を持ち、新たな価値創造に挑む人材を育成する。

「目指す生徒像」と関連した高校魅力化評価システムの質問項目（主体性・協働力）

	指　　標	2023①	2023②	全国平均
1	主：自己肯定感（51,52）	67.9%	*72.3%*	66.0%
2	主：学ぶ意欲（38,61,67）	77.6%	70.3%	66.6%
3	主：計画力（40,53）	74.8%	65.4%	60.1%
4	主：意志ある選択（68,86,87）	80.1%	*81.3%*	74.5%
5	主：創造的市民性（58,60,88,89）	60.5%	58.9%	57.9%
6	主：自己理解（100,101）＊	-	87.7%	-
7	協：受容力（43）	98.5%	98.5%	93.2%
8	協：対話力(42＋②98)	95.5%	87.7%	89.3%
9	協：共創力（44＋②99）	77.6%	*82.4%*	69.4%
10	協：持続可能性意識（60,68）	70.2%	*70.7%*	64.0%
11	協：グローカル意識（59,63,64）	68.1%	*70.3%*	63.2%

＊主：自己理解 ※①指標なし（挑戦心の「伝える力」と近いか）、②追加質問

「目指す生徒像」と関連した高校魅力化評価システムの質問項目（挑戦心・その他）

	指　　標	2023①	2023②	全国平均
1	挑：情報収集活用力（45）	86.6%	83.1%	82.2%
2	挑：課題設定力（39＋②93）	82.1%	76.2%	72.8%
3	挑：思考力（41,54）	70.2%	65.4%	64.5%
4	挑：創造力（79＋②96）	46.1%	*57.7%*	56.4%
5	挑：行動力（71,74,75,76）	78.0%	*79.2%*	69.5%
6	挑：やり抜く力（37,47）	76.9%	*82.3%*	73.2%
7	挑：伝える力（49,50）	63.3%	*67.0%*	63.9%
8	挑：振り返る力（48＋②97）	83.6%	*85.4%*	75.5%
9	挑：共感力（94,95）＊	-	84.6%	-
10	70.地域社会等でﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動に参加した	39.4%	*50.8%*	23.1%
11	66.この学校に入ってよかったと思う	97.0%	90.8%	86.9%
12	90.この学校を中学生におすすめできる	93.9%	84.6%	79.3%

＊挑：共感力 ※①指標なし（協働力の「受容力」「対話力」と近いか）、②追加質問

昨年度の結果レポートから読み取った成果と課題

成果

○全体的に肯定的な回答の割合が高く、他地域と比較しても高位

○「自己肯定感・自己有用感」が年々回復［R1:52.8%／R2:57.6%／R3:58.5%／R4:68.4%］

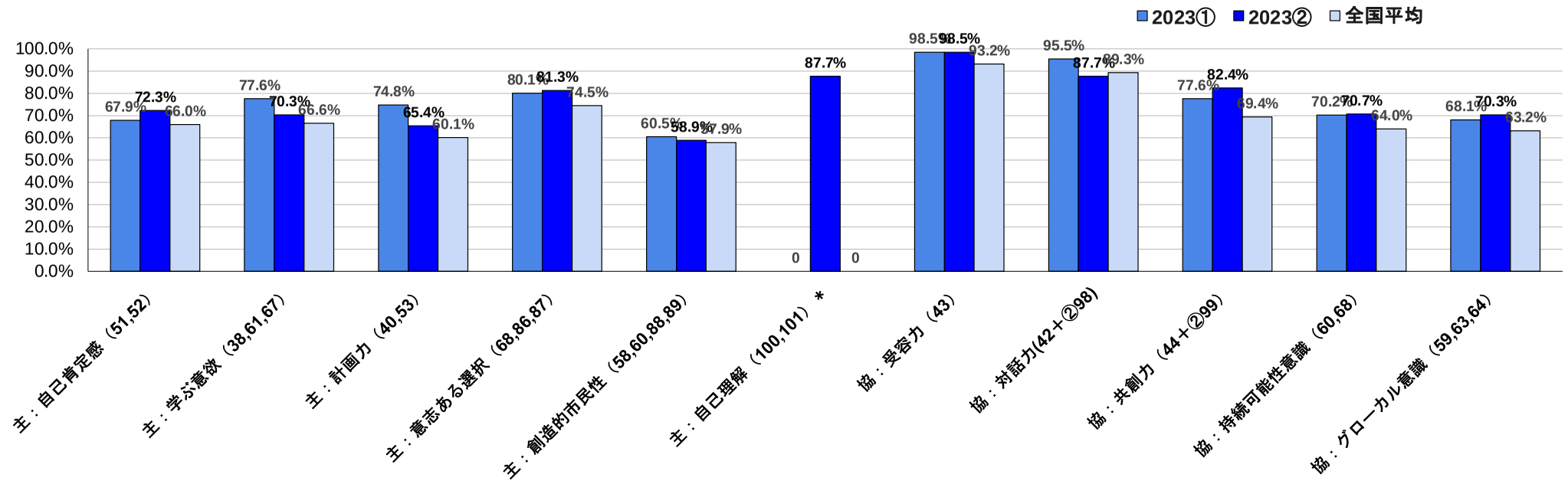
○「学ぶ意欲」：自己認識は各学年とも高位で安定している＊

課題

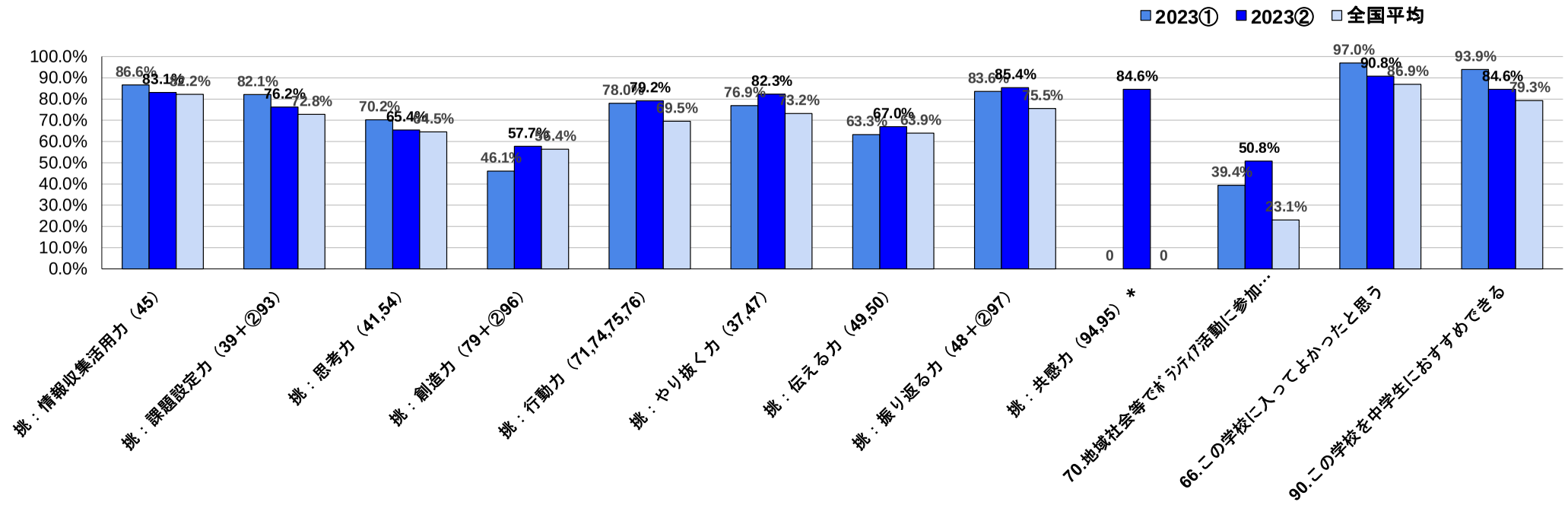
▲「対話力」：個別の学びは進む一方、「学び合い」までは発展していない、もしくは、「学び合う」機会が不足している側面が見られる＊

＊印：昨年度の運営指導委員会にて、運営指導委員の阿部剛志氏よりご指導いただいた部分

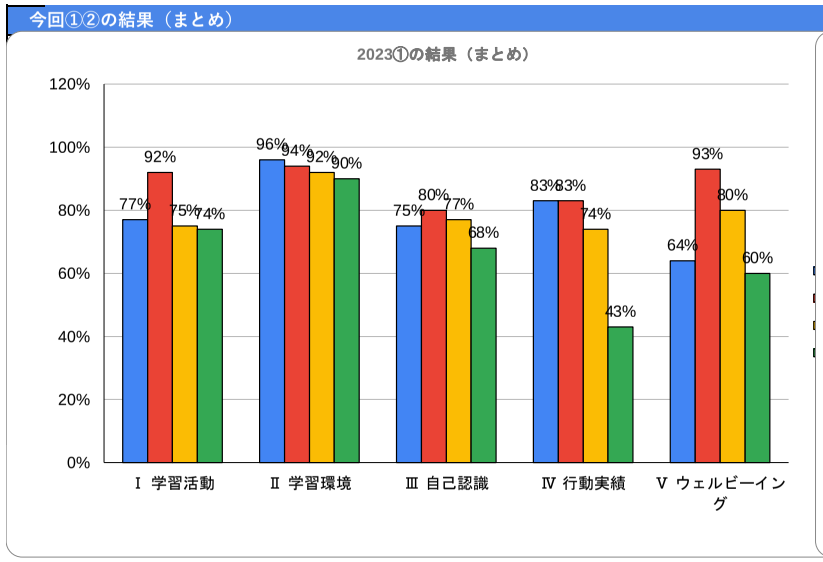
「目指す生徒像」と関連した高校魅力化評価システム①②結果（主体性・協働力）

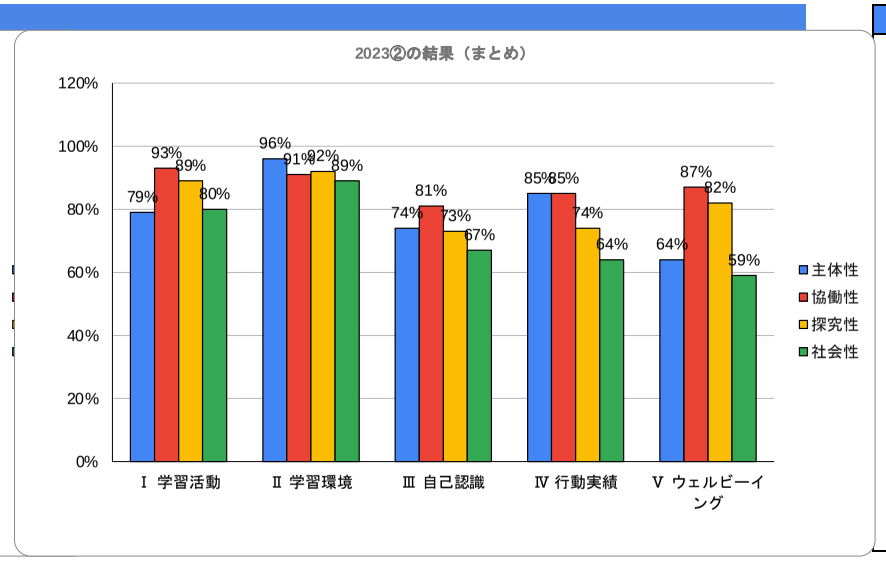


「目指す生徒像」と関連した高校魅力化評価システム①②結果（挑戦心・その他）



今回①②の結果（まとめ）





今年度の結果レポートから読み取った成果と課題

2.全国高等学校小規模校サミットの取り組み

第６回全国高等学校小規模校サミット 2023.7.27Thu（南陽市民体育館）

目的：課題をシェアすることで、地域の活性化につなげ、自分や地域にとっての新しい価値を見い出し、次の目的を探す！

グランドルール：「積極的に自分から発言」「相手の意見を尊重」

趣旨：全国の小規模高校の生徒が交流し親睦を深めると共に、各校・地域が抱える課題について意見交換し、将来それぞれの地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成する。

大会主題：「今ここで起こっていることは、将来日本中で起こり得ること、小規模校だからこそできることがきっとある」～仲間と一緒に未来を考えよう～

〈当日の流れ〉
1.開会　2.アイスブレイク　3.参加校取組紹介
4.講演「小さな高校・地域の力を活かし、課題を共に越えていく」
岩本 悠 氏（一般財団法人地域・教育プラットフォーム代表理事／島根県教育魅力化特命官）
5.生徒交流（ワークショップ）　6.閉会

〈小規模校サミットの軌跡〉
2017/12/15-16　岩手県立花泉高校との交流
↓生徒「もっと交流したい」の声から企画
↓東北芸工大 岡崎先生との出会い
2018/8/2　第１回（旧小玉川小中学校）１２校１０７名
↓「生徒が企画・運営、大人は伴走」のスタイルが定着
2019/7/31　第２回（松風館）１７校１３２名
↓荒砥高生が実行委員として参画
2020/11/14　第３回（オンライン）２１校１９４名
↓コロナ禍でもICT機器を活用しオンラインで初開催
2021/10/23　第４回（オンライン）２３校１９１名
↓オンラインの利点を活かし、事前の研修・交流を密に計画実施
2022/7/28　第５回（南陽市民体育館）１１校１０５名
↓３年ぶりの対面開催！配慮しながらもリアルで会う喜びを実感！
2023/6/14　文部科学省の後援事業として承認
2023/7/20　プレセッション（オンライン）
2023/7/26　レセプション in 山形県立小国高校

〈参加生徒の感想〉
★小規模校であることを少し嫌に思っていたが、サミットをきっかけに、小規模校は最先端だということを知れて良かった
★地元にも沢山いい所があって、たくさんの魅力を改めて知ることができた。
★参考にしたい企画がたくさんあってモチベーションにつながった！
★自分の考えをしっかりと言えたし、県外生とたくさん話して仲良くなれた
★それぞれの学校で抱えてる課題など共通点が多くあった
★年一回だからこの場だけになってしまう関係が多い気がするので、今後も繋がって交流していきたい
★小規模高だからダメだなーとか、やれないなーとかって思ってたことがなくなった気がする

参加校 ７県１５校１２８名
（うち山形小国７０名、ゲスト５８名）
山形県立谷地高等学校
山形県立左沢高等学校
山形県立南陽高等学校
山形県立荒砥高等学校
山形県立避佐高等学校
山形県立新庄南高等学校金山校
福島県立石川高等学校
福島県立西会津高等学校
福島県立船引高等学校
長野県明科高等学校
広島県立油木高等学校
島根県立吉賀高等学校
山口県立防府高等学校佐波分校
高知県立大方高等学校
山形県立小国高等学校

小国高校生の成果

- 主催者として、開催目的を問い直したことによる意義のアップデート（目的の明確化が大きな変化につながる）
- オンラインとオフライン、それぞれのコミュニケーションスキルの習得と場の有効活用（相手の視点からの想像、協働する価値の実感）
- 地元を誇れる機会の創出（地元に招待することで地元生の強みを発揮、地域の方々の心意気を感じる、おもてなしの気持ちの高まり、学びを生かした魅力発信）
- 県外生（＝異なる環境で育った同年代）が身近にいることの強み（常に多角的な視点から分析し思考できる）
- 小規模高校ネットワークの拡がり（オンライン授業仲間との対面の喜び、つながり開拓）

3.報道記事

230326山形

暮らして 感じたこと

1年間留学「楽しかった」

県外出身の小国高生、活動報告

小国高での学びや暮らしぶりなどを報告する生徒たち　＝小国町役場

小国

小国町の小国高（米野和徳校長）2年生として、1年間留学した県外出身の生徒3人の報告会が24日、町役場で開かれた。「毎日が楽しかった」「行動力が身に付いた」などと笑顔で振り返り、それぞれ新たな目標に向かって挑戦し続ける意気込みを述べた。

高校2年生の1年間のみ別の高校に通学できる「地域みらい留学365」の制度を活用した、城所紗希さん(17)＝東京都出身、一柳帆花さん(17)＝愛媛県出身、二宮緋毬さん(17)＝大阪府出身。出身高校に在籍しつつ、小国町内に住み小国高に通学した。

3人は学校生活や暮らしぶりを写真と動画で紹介しながら発表した。「親元を離れてみて自己管理の大切さを知った」「小国での生活を交流サイト（SNS）で発信した。地元に戻り、小国高のように活気ある学校にしたい」「人生のベースとなる力が身に付いた。いろんなことに挑戦したい」などと熱く語り、同級生や町民への感謝の気持ちを伝えた。

出席した米野校長や遠藤啓司教育長らがねぎらった。仁科洋一町長は「いつでも遊びに来てほしい。その時は『おかえりなさい』と迎える」と述べた。（石井剛）

山形新聞 2023年3月26日
写真提供/山形新聞社

230330山形

学生がつくる山形県の
着地型旅行プランコンテスト
最優秀賞

小国高2年　齋藤心花さん

「都会の2世代が白い森おぐにの自然とふれあう夏」
小国町の魅力、自然、食文化を、都会に住む人たちと
地元の人が一緒に体験するプラン。

山形新聞 2023年3月30日
写真提供/山形新聞社

230415山形

小国高への〝留学生〟8人が意気込み語る

下宿し通学、町民と交流

小国町の小国高（山科勝校長）で学ぶ県外出身の〝留学生〟8人が11日、町役場を訪れ、仁科洋一町長らに意気込みなどを語った。

8人は国などの「地域みらい留学制度」を活用し同校に通学する。「地域みらい留学365生」は出身高校に在籍しながら高校2年生の1年間通い、「白い森留学生」は同校生として本年度から3年間学ぶ。

365生は埼玉、沖縄両県の男女3人。白い森留学生は東京、神奈川、千葉、埼玉、福岡の各都県からの男女5人。寮や町民宅に下宿して生活し勉学に励む。このほか町民との交流を通じ、同町の自然や文化などへの理解を深める。

仁科町長は「（歴史的な背景もあり）町には町外の人を受け入れてきた土壌がある。遠慮なく町民に声をかけて、いろいろな事を吸収してほしい」とエールを送った。白い森留学生の1年前園美空（みく）さん(15)＝東京都出身＝は「課外活動などの魅力もあり進学を決めた。雪と桜が同時に見られる光景やマタギ文化の情報発信などに取り組みたい」と意気込んだ。（小池拓海）

記念撮影する生徒たち＝小国町役場

山形新聞 2023年4月15日
写真提供/山形新聞社

2023年（令和5年）6月27日（火曜日）　地域　山形新聞

小国高生、人生設計学ぶ

講師のわださん「挑戦の時間、たくさんある」

ライフデザインセミナーが13日、小国町の小国高（山科勝校長）で開かれ、2年生26人が仕事や子育てなどの人生設計について理解を深めた。

セミナーは生徒たちに将来のライフプランについて考える機会を提供しようと、2013年度から県が主催している。この日は生き方コンサルタントのわだゆきこさん(45)＝山形市在住＝が講師を務め、人生をより良くするためには「見る・聞く・会うことの三つが大切」と述べた。

人生の80年間を1日に例え「皆さんは16、17歳で朝の4、5時くらい」と説明。親の勧めもあり山形市役所で保健師として勤務していたものの、35歳で母親を亡くしたことをきっかけに自分の人生を見つめ直した、自身の経験を踏まえて「皆さんはさまざまなことに挑戦できる時間がたくさんあり、（人生の）道は一つじゃない。自分の望み通り使ってほしい」と説いた。

妊娠に関して、人によって個人差があると前置きした上で、卵子や精子の関係で年齢が上がれば上がるほど確率が低くなると紹介。このほか、パートナーと子育てしながら生活しているとの設定でワークショップも実施した。

井上勇太さん(16)は「これからの人生で行動する上で、必要な知識や情報を得る重要性が分かった」と話した。（小池拓海）

ワークショップで生徒の発表を聞くわだゆきこさん（右）＝小国町・小国高

山形新聞 2023年6月27日
写真提供/山形新聞社

2023年（令和5年）7月28日（金曜日）　社会総合　山形新聞

小規模校なら挑戦ができる

南陽、全国高校サミット

小国町の小国高（山科勝校長）による「全国高校小規模校サミット」が27日、南陽市民体育館で開かれ、本県や福島、高知など7県15校の計約130人が参加した。各校が特徴的な取り組みを紹介したほか、小規模校に共通する課題などについて意見を交わした。

小国高が実行委員会事務局を務める同サミットは2018年に始まり、6回目。本県からは小国、谷地、左沢、南陽、荒砥、遊佐、新庄南高金山が参加した。

参加校は小規模校の強みを生かした実践活動や、地域と協働の取り組みなどを発表した。小グループに分かれたワークショップでは、地域や学校でやりたいイベント、課題などを挙げ、その実現や解決策についてアイデアを出し合った。

講演した島根県教育魅力化特命官の岩本悠さんは、小規模校の可能性の大きさを指摘。「どんどんチャレンジができるし、結果もすぐに出る。しかも地域の人が協力してくれる。新しいこと、面白いことができる環境がある」と述べた。

総合司会を務めた小国高2年安部茜さん(17)は、地域の新しい価値や次の目的が見つかるサミットにしたいと準備を進めてきた。「小規模校として、個人として、一歩前進できるようになったらうれしい。みんなが笑顔で取り組んでくれてほっとした」と話した。（石井剛）

ワークショップで意見を出し合う参加者＝南陽市民体育館

山形新聞 2023年7月28日
写真提供/山形新聞社

事故・犯罪 気を付けて

小国高生ら 児童に呼びかけ

小国

小国警察署（森本和幸署長）は小国町の小国小で広報啓発活動を行った。小国高の有志4人らが登校中の児童に事故や犯罪への注意を呼びかけた。

いずれも2年生の沢田旭さん(16)、桜井優菜さん(16)、大津佳純さん(17)、飯田晴基さん(17)のほか、署員や小国地区少年補導員連絡会員ら計16人が参加。「おうちの人に遊びに行く場所を伝えてから出かけてね」などと声をかけ、生徒がデザインしたイラスト入りポケットティッシュを渡した。警察官志望の飯田さんは「水の事故に遭わないよう、自分も気を付けたい」と話した。（小池拓海）

登校する児童にポケットティッシュを手渡す小国高生ら（左）＝小国町・小国小

230722山形

山形新聞 2023年7月22日
写真提供/山形新聞社

2023年（令和5年）10月13日（金曜日） 地域 山形新聞

理想のマチへ 若者の声

市議・町議と意見交わす

小国高3年生がアイデアを提案

小国町議会は3日、同町のおぐに開発総合センターで、小国高（山科勝校長）の生徒との意見交換会を開き、町議10人と3年生15人がまちづくりのアイデアを出し合った。

若者の声を町政に生かそうと2012年度から交流企画を続けており、生徒は大人から地域の実情を聞く探究学習の一環で参加している。この日は、狩猟をなりわいとする「マタギ」や除雪車を運転するオペレーターを増やす方策、結婚に対する価値観、同校（町）と卒業生をつなぐ方策をテーマに、4班に分かれて話し合った。

「除雪」班では、「女性受けを意識し、除雪車のカラーバリエーションを増やす」「『除雪名人になりませんか』などのキャッチコピーで県外から募集する」といったユニークなアイデアが聞かれた。佐藤愛結さん(18)は「除雪はされているのが当たり前と思っていたが、議員の方との対話でさまざまな苦労や課題があると知ることができた」と話していた。（上妻大晃）

▲まちづくりのアイデアを話し合う小国町議と小国高生＝小国町・おぐに開発総合センター

山形新聞 2023年10月13日
写真提供/山形新聞社

「大切な命を守る」全国作文コンクール

舟山さん（小国高3年）最高賞

警察庁の「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールで、小国高3年舟山留愛さん(17)の作品が最高賞の国務大臣・国家公安委員会委員長賞に選ばれた。輪禍で長男を亡くした女性の講話から得た、自身の気付きを丁寧につづった。舟山さんは「悲しい事故が起きないよう、自分に何ができるかを考えるきっかけになった」と話した。

国務大臣・国家公安委員会委員長賞を受賞した感想を語る小国高3年の舟山留愛さん　＝小国町役場

事故防止 気付きを丁寧に

題名は「失ってから気付く命の大切さ」。昨秋に同校で行われた「命の大切さを学ぶ教室」で感じた思いなどを記した。小学2年生の息子が命を落とした事故の状況や当時の心境などを語る講師の女性の姿から、「失って初めて命の大切さに気付くつらさに共感し、心を動かされた」という。

その上で、小学生の頃に道路に飛び出して事故に遭いかけた経験や、当たり前の日常を失う恐怖感を踏まえ、歩きながらスマートフォンを操作しないことやイヤホンを使いながら自転車に乗らないことなど、「一つ一つの意識や行動を家庭内で確認し合う。それが命を守り、『生きる』ことに結びつく」と指摘した。

運転免許を取得することで、自身が加害者にもなり得ることを胸に刻み、「世の中で起きている事故に目を向け、危機感を持つことが大事なのだと知った」と総括した。

舟山さんは4日、小国町役場を訪れて仁科洋一町長に受賞を報告。「驚きでしかなかったが、苦しい思いをしている人に寄り添うことができる大人になる思いを強くした」と話した。

コンクールは13回目。全国から計1万7670点の応募があり、国務大臣・国家公安委員会委員長賞は中学生、高校生の各部で1点ずつ選ばれた。

（須藤仁）

山形新聞 2023年12月5日
写真提供/山形新聞社

2023年（令和5年）12月8日（金曜日） 地域 山形新聞

街かどアラカルト

斎藤さんに善行賞

小国

小国町の小国地区少年補導員連絡会（多勢信人会長）は4日、転倒した高齢者を介抱した小国高1年斎藤陽さん(15)に善行賞の表彰状を贈った＝写真。

斎藤さんは今年10月の下校中、町内の高齢男性が転んで倒れているのを見つけ、家族が迎えに来るまでこの男性に付き添った。この日は多勢会長が同校を訪れて表彰状を手渡した。斎藤さんは「けがした上に雨も降っていたので、1人にしちゃいけないという思いだった。少しでも人の役に立てて良かった」と話していた。（須藤仁）

山形新聞 2023年12月8日
写真提供/山形新聞社

全国作文コンクール最高賞 舟山さん（小国高）

県警本部長に受賞報告

鈴木邦夫県警本部長に受賞を報告した舟山留愛さん（右）＝県警本部

警察庁の「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールで、最高賞の国務大臣・国家公安委員会委員長賞に選ばれた小国高3年舟山留愛さん(17)が19日、県警本部を訪れ、鈴木邦夫本部長に受賞を報告した。鈴木本部長は「大変素晴らしい。受賞を契機に立派な社会人になってほしい」とたたえた。

舟山さんは「失ってから気付く命の大切さ」と題し、交通事故で長男を亡くした女性の講話を聞き、自身の気付きや事故防止の取り組みの重要性について感じたことを丁寧につづった。鈴木本部長に報告し、「被害者にも加害者にもならないよう、危機感を持つ大切さが多くの人に伝わればうれしい」と話した。

コンクールは全国から計1万7670点の応募があり、国務大臣・国家公安委員長賞には中学生、高校生の各部で1点ずつ選ばれた。（棚井さとみ）

23 12 20 山形

令和5年
12月20日（水）

山形新聞 2023年12月20日
写真提供/山形新聞社

放課後は楽しくサークル活動

小国高　部活動代わり、住民が指導役

小国町の小国高（山科勝校長、69人）が部活動に代わる新たな放課後活動を展開している。ニーズに応じた企画に希望者が参加するサークル活動で、これまで木工品製作や農作物栽培、お菓子作りなどを実施。地域住民が指導役として加わるなどし、生徒も「まちを知り、社会を考える契機になる」と感じている。

木工や畑…まち知る契機に

全国的に部活動の在り方が問われる中、同校でも生徒数減少の影響を受け、昨年度の部活動はソフトテニスと情報処理研究、ライフクリエイトの三つだけ。運営に支障が生じていることから部活動の枠にとらわれない取り組みを検討し、任意参加の放課後活動を本年度から本格的に導入した。

町教育委員会と連携し、生徒が興味のある取り組みを学校関係者や地域住民がサポートする形で活動を展開する。本年度は生徒の要望を受けて▽木工▽畑▽写真▽スイーツ―の四つのサークルが立ち上がった。

木工は同校で非常勤講師を務める地元の高橋泰弘さん(44)が付き添い、町教委から依頼を受けた町民も作業に協力する。活動内容は生徒と打ち合わせをして決め、これまでネームタグや竹灯籠などを仕上げた。

能登半島地震関連のチャリティーイベントに出品する木工時計作りは生徒7人が取り組み、高橋さんや町地域おこし協力隊の北風裕基さん(24)と一緒にのこぎりややすりを使ってアイデアを形にした。高橋さんは「自主的に参加するので生徒の表情が生き生きしている」と実感する。

「多様な挑戦ができる環境は自分の成長につながっている」と横浜市出身の1年長谷川開さん(16)。地元の2年小林嘉暢さん(17)は「興味のあることに取り組めるので放課後の時間が充実した。地域を見る視野も広がった」と話す。

同校は「主体性はもちろんだが、地元住民との関わりは生徒の学びにもつながっている」と手応えを口にし、さらに活動の幅を広げたい考えだ。（須藤仁）

北風裕基さん（左）ら地域住民の協力を得ながら木工時計作りに取り組む生徒　＝小国町・小国高

山形新聞 2024年1月31日
写真提供/山形新聞社

2024年（令和6年）2月17日（土曜日）　山形新聞

主体性育む放課後活動

小国高、部活動に代わる取り組み導入

小国町の小国高（山科勝校長、69人）は本年度、部活動を廃止して新たな放課後活動をスタートさせた。企画ごとに希望者が参加するサークル活動で、生徒が目的意識を持って木工品やお菓子作りなどに励んでいる。地元住民も指導役で加わるなど、地域と密着した小規模校の利点を生かし、子どもたちの放課後の取り組みを支えている。

同校によると、少子化による生徒数減少で近年は部活動の運営に支障が生じていたという。代替となる取り組みを模索し、任意参加の放課後活動を導入。生徒の要望を踏まえて▽木工▽畑▽写真▽スイーツの各サークルが立ち上がった。

活動は町教育委員会と連携し、生徒が興味のある取り組みを学校関係者や地域住民がサポートする形で展開している。同校は「地域との結びつきが強いからこそ実現できた」とし「住民との触れ合いは生徒の刺激になっている」と話す。

スイーツの商品開発に取り組む生徒。部活動に代わる放課後活動を通じて生徒の主体性を育んでいる　＝小国町・小国高

木工品やお菓子作り　地域住民らがサポート

木工は地域活動に取り組む自営業高橋泰弘さん(44)が付き添い、生徒との打ち合わせで活動内容を決めている。チャリティーイベント向けの木工時計作りには7人の生徒が参加し、高橋さんと町地域おこし協力隊の北風裕基さん(24)に教わりながら製作。同校の非常勤講師も務める高橋さんは「自主的に参加するので生徒の表情が生き生きしている」と実感する。

スイーツでは、生徒15人が都内でのイベント販売を視野に商品開発に取り組んでいる。加藤貴央教諭(32)のアドバイスを基に地元酒蔵の酒かすや東京・港区産のハチミツを用い、どら焼きやパウンドケーキなどを試作し、改善点などを話し合っていた。

「以前は時間を持て余していた感があった」という川崎市出身の2年沢田旭さん(17)は木工とスイーツで活動し「今は放課後が充実している」。地元の1年大谷唯人さん(15)は畑での農作物栽培を通じて「さまざまなことに挑戦したことで多くの学びがあった」と話す。同校は「生徒の主体性の育成にもつながっている」と感じており、新年度はより活動に幅を持たせたい考えだ。（須藤仁）

山形新聞　2024年2月17日
写真提供/山形新聞社

2024年（令和6年）2月18日（日曜日）　地域　山形新聞

働く意義「先輩」に学ぶ

小国高生、若手社会人と懇談

小国　小国高生と小国町内の若手社会人らによる懇談会「ハタラトーク！」が16日、同校で開かれ、グループディスカッションを通じて高校生が働くことの意義について理解を深めた＝写真。

1年生25人と、町内の企業や町役場、福祉施設などから15人が参加した。生徒はブースを回りながら「仕事のやりがいってどんなところ」「福利厚生って何」「休日はどう過ごしているか」など、業務内容からプライベートにわたって幅広く質問し、「先輩」の回答をメモしながら将来について思いをはせていた。

東京都出身の前園美空さん(16)は「仕事も生活の一部として捉えるのは新たな視点だった。進路を考える際の参考にしたい」と話していた。高校生に自分の「生き方」を考える契機にしてもらおうと、町教育委員会が開催した。（須藤仁）

山形新聞 2024年2月18日
写真提供/山形新聞社

第6回全国高等学校小規模校サミット